

昭和36年10月30日 第三種郵便物認可  
平成9年8月1日発行(毎月1回1日) 第994号

# 三田評論

'97  
8・9 月



特集 フランス

—「フランスにおける日本年」に際して

慶應義塾

白夜

井口傑いぐち けつ

(本塾大学医学部専任講師)

二十年前の話だが、私はスウェーデンに留学していた。ある夏、急に真夜中の太陽が見たくなり、妻と四歳の娘を連れ、ヨーロッパ大陸の最北端と言われ、大陸から数キロ離れた島にあるノルウエーの北岬きたさきへと車で出かけた。やっとの思いで対岸まで辿り着き、真夜中までに北岬に着こうと峠道を飛ばした。岬を越えると海から濃い霧がわき上がり視界を隠した。展望台に向う頃にはまるでミルクの中を手探りで歩く状態であった。最北端の碑の前に立つと、遙か下の方から波が砕ける音が響き、高い崖の上のテラスに居ることが解る。緑の牧草は霧に冷たく濡れ、僅かに明るい方向に水平線上の太陽があるのと知れる。腕時計が十二時を指したので、眠そうな娘に今は白夜だから真っ白な霧の向こうには真夜中の太陽が出ているはずだと教えた。地球儀を見ながら地球のてっぺんへ行けると喜んでいたら娘は、白夜って真っ白で何も見えない夜のことだと納得していた。

上海の暑い夜

磯部靖いそべ せい

(本塾大学大学院博士三年・平4文)

上海に留学直後、早朝のキャンパスを散歩していると、グラウンドに横たわる無数の不浪者を目撃した。しかし勇気を出して近づいてみると、それは学生たちであった。何も彼らは宿無しであるわけではない。ただ部屋が暑すぎて寝られないが故の奇策なのであった。

私は冷房はおろか扇風機さえない寮に住んでいたが、気温が四十度を越える日中にももちろん、夜も死ぬほど暑かった。あまりにも忍びがたく、夜中に何度も水浴びをせざるを得なかった。一晩に十五回も水浴びしたと豪語する輩もいたくらいである。アフリカのある留学生は思いあまって、機関銃をぶっ放してやりたくなるほど暑いと音をあげていた。

ある晩、私はついに「不浪者」の大群に加わる僥倖を得た。いざ地面に横たわってみると世界がまるで違って見えた。しかも夜風が頗る心地よく、すぐ寝入ってしまった。翌朝夢から覚めたのは、グラウンドを走る人の足音によってであった。

妖精が教えてくれること

岡田彩加おか たあや

(本塾大学大学院博士一年・平7文)

『真夏の夜の夢』と言えば、バック。そして妖精の王と女王、豆の花、クモの巣、辛子の種の妖精など、たくさん妖精たちが登場し、彼らの活躍で一夜のうちには二組の恋人たちが生れるのです。かつて、「サンタクロースっているの

でしようか」という少女の質問に新聞の社説で答えた記者は、「サンタクロースが信じられないのは妖精が信じられないのと同じです」と書きました。愛や思いやりなど、この世で本当に大事なことは、カーテンで覆われていて人の目には見えませんが、「信頼と想像力と詩とロマン」だけがそのカーテンと「瞬引き」のけて、幕の向うの例えようもなく美しいものを見せてくれる」というのです。

シェークスピアのこの作品が、四百年後の今もなお愛され続けているのも、せわしない毎日に流されているうちに忘れてしまっていた、人間として大切なものを思い出させてくれるからなのでしょう。あなたは妖精を信じますか。